

ポストすばるに向けて ～どうする大学院生？～

長尾 透（東北大学天文学教室）

1. はじめに

光天連シンポジウム集録の発行に際し、大学院生という立場からポストすばるの議論に対するコメントをというリクエストを、「大学の活性化」セッション担当の富田さんからいただきました。大学院生を代表する意見などは筆者の手に余るため書けませんが、地方大学に所属する一大学院生としてポストすばるの議論に対して感じている事をコメントさせていただこうと思います。

2. ポストすばるは他人事？

地上超大型望遠鏡かスペース 8m かといったポストすばるの議論が、サイエンスからの要望や必要とされる技術開発要素、また予算との兼ね合いなどという方面から具体的かつ活発に行われている事を、今回の光天連シンポで初めて知りました。非常にエキサイティングでわくわくする内容でしたが、一方でどこことなく他人事のような印象も受けました。行われている議論に自分がどのように関わっていけるのが全く想像できなかったからです。国立天文台内のワーキンググループ等で今後も引続きポストすばるの議論が行われていくと思われませんが、地方大学にいながらそういった場面に出席し、参加していく事は少々難しい事のように思われます。

「少々の困難があっても自分で積極的に議論の場に参入していく位の元気がなければ困る」という意見もあるでしょうが、地方大学の大学院生の実情を把握されている方ならばこの考え方にはやや無理がある事を理解していただけたと思います。地方大学で出張旅費を公費などから工面できる研究室は非常に少ないですし、自分の科研費を持っている院生もほとんどいません。また、北海道や九州から頻繁に東京に出張するだけの時間をポストすばるの議論のために割く事ができる大学院生も多くはありません。このような条件を個人の努力と負担で克服することは、不可能ではありませんが現実的でもありません。そう考えると、結局はポストすばるの議論は自分の手の及ばない話だと捉えざるを得なくなります。

それゆえ、今回のシンポジウムで、今後継続的にポストすばるについて広く議論していくためのしくみ作りについて言及されたことには非常に強い関心を持ちました。現状であまり多くの大学院生がポストすばるの議論に関わっていないのは興味関心が低いだけでなく、関わっていくためのチャンネルが見当たらなかったためと思われる。テレビ会議システムや光天連のメーリングリストなどを活用し、地方の大学に所属する人でも議論に参加できるような枠組を作った上でポストすばるの議論への参加を呼びかけるならば、より広い層からの意見が集約される議論が実現できると思います。それはポストすばるを具体化する上で非常に望ましい事であると言えるでしょう。

3. ポストすばる時代を担うために

ポストすばるの議論を深める一方で、ポストすばる時代を担う人材をしっかりと育成するために、各大学における個々の中・小規模プロジェクトを大学院生がもっと頑張れるようにしていくべきだという話も、今回のシンポジウムで聞いた話の中で特に印象深いものでした。研究のセンスを磨くべき大学院生時代に、院生自身の自由な発想に基づく装置開発や系統的な観測的研究を経験する事は（そしてきちんとアウトプットを出す事は）、研究者としての成長という観点からは極めて有効なものと思われる（これは speculation ですが）。そういった研究環境を実現するためには、現在の共同利用型施設だけではなく、TAO や 京都 3m 望遠鏡、みちのく望遠鏡といった「大学望遠鏡」の整備を推める事が不可欠でしょう。ただし、全ての大学がそういった施設を持つ訳にはいかない以上、これら大学望遠鏡の運用が所有大学内で閉じてしまわないように配慮する必要があります。今回のシンポジウム内で、国立天文台の組織改変との関係で各大学のプロジェクトをサポート・バックアップしていくしくみを具体化できないかという議論もなされたかと思いますが、そういったしくみ作りは一大学院生として非常に魅力的に感じられるという事をここで強調しておきたいと思えます。